

NEWSLETTER of The Japanese Society for Applied Animal Behaviour

No. 14, October 2008

◇ISAE Council Meeting (2008 DUBLIN)報告

応用動物行動学会 会長 近藤誠司
(北海道大学北方圏フィールド科学センター 教授)



2008年8月5日から8月9日まで、アイルランドの首都ダブリンで第42回国際応用行動学会議(ISAE2008 Dublin、以下 ISAE 学会)が開催された。ISAE 学会のレジスタレーション日である5日に、恒例により ISAE

Council Meeting (理事会)が、会場の University of Dublin College (UDC)の獣医学科ビルディングで開催された。近藤は東アジア地区理事 (Regional Secretary) として、この会議に出席した。なお、昨年と同様、参加には応用動物行動学会が管理する基金の補助を受けている。また、同基金から麻布大学大学院博士課程の新村会員および北海道大学大学院博士課程の多田会員が補助を受けた。

私ども北大からの出席者2名は、割引チケットの都合で8/3にロンドン入りし、1泊後4日午後遅くダブリンに到着した。UDC は広大なキャンパスで、宿舎である学生寮にたどり着くまで一苦勞であった。翌5日は朝10時から Council Meeting が開始され、夕方18時過ぎまで続いた。同行した北大院生の多田会員は、指導教官が拘束されているのを知ることになり、1日ダブリン市内観光を愉しんだようだった。当日はフェアウエル・パーティが予定されていたが、学会のメイン会場である O' Reilly Hall で20時からということもあり、昨年のようにせかさされることなく行われた。なお、毎回この Council Meeting はやたらに時間がかかるが、今回は内容が比較的手際よくまとめられており、18時までという長丁場ではあったが、いつもほど冗長な感じを受けなかった。

当日理事会の出席者は昨年からの会長となった Janice Swanson 女史はじめ、各役員、地区理事など15名で、別に本学会の実行委員会メンバー Alison Hanlon 氏と Elsevier 社から Wim Meester 氏がそれぞれの報告時のみ出席した。

会議は Swanson 会長の開会の挨拶に引き続き、出席者の確認と欠席者のお詫びがあり、ついで前回のメール会議での議事録の確認があった。これらに加えて、全部で17項目の議

題が用意され、それ以外にも追加 2 項目の議題があげられた。内容をかいつまんで紹介する。

ISAE2008 Dublin 学会のこの時点での状況が、大会実行委員の Alison Hanlon 氏から報告された。全参加者 411 人で、昨年のメキシコ学会の参加者 241 名より 200 人弱多く、また一昨年の Bristol 学会より 30 名ほど多い。なお総会で ISAE の現会員数は 550 名と報告されており、このダブリン学会の参加者は極めて多いことがうかがわれる。ウエルカムパーティには 351 名が、バンケットには 201 名が、フェアウエルパーティには 325 名 が参加したとのことであった。バンケットは有名なトリニティ大学の壮麗なホールで行われたが、結構高額なお金を取ったことが参加者が少なかった理由かもしれない。エクスカーションは 6 コース設定され、Dublin Zoo と Newgrange および Knowth 行きが最も人気があった。全部で参加者は 230 名であった。この学会への寄付は総額で 40,000 Euro (1 Euro=150 円でおよそ 600 万円) であり、メインスポンサーは the Science Foundation Ireland だとのこと。なおこの学会での発表については発表者の 50% が口頭発表を望み、うち 20% のみが実際に口頭発表した。今後、口頭発表の会場を 3 つにし、3 parallel sessions で実施することも考えるべきとのサジェスションがあった。Abstract Handling System には若干問題があったことも報告された。WAP (Wageningen Academic Publishers) は人によっては愛想がないと受け取られ、また厳密な手順を要求する点がやや不評であった。

Carol Petherick 女史から主に今後の ISAE 学会について報告があった。第 43 回 (2009 年) は Australia の Cairns で 7 月 6-10 日に開催され、Wood-Gush Memorial Lecture は Dr. Lesley Rogers が予定されている。なお、このダブリン学会では小さなコアラ人形が配られるが、来年の参加者はこれをもって Cairns に来ることが期待されているとのことであった。Website はすでに開かれている (www.isae2009.com)。

第 44 回 (2010 年) は Sweden の Uppsala で開催され、実行委員会は発足しているとのこと。第 45 回 (2011 年) については米国の Purdue 大学が非公式に手を挙げている。これについては Marek Spinka 氏が公式に申し込むよう論議することとなった。第 46 回 (2012 年) はオーストリアのウィーンで開催予定。

2016 年は本 ISAE 学会の 50 周年記念になる。そこで Janice Swanson 会長は英国 Edinburgh へ戻ることを提案した。実行委員は Cathy Dwyer, Françoise Wemelsfelder, Alistair Lawrence, および Vicky Sandilands 各氏が指名される予定。それ以外の開催地については未だどこも手を挙げていないとのことだった。

この学会への参加補助事業として 2000 ポンドが支払われた。遠隔地からの参加者は旅費だけでも高額で、Congress Attendance Fund (CAF) だけでなくいくつかファンドを得ているのが現状であり、CAF 資金の割り当てを考えた方が良いかどうか論議した。

そのほか、現在の abstract submission system (Wageningen Academic Publishers : WAP) の問題点が話しあわれたが、前回の winter meeting では一応 WAP で続けることになってい

る。ただし、今後も継続審議する。また米国や豪州では現地で寄り安い業者が見つげうることも指摘された。

退職した会員の登録料を低く設定する案が出され、大学院生の割引と同様に今後会計と協議することになった。この学会で指摘されたような、会場を増やす案については今後それぞれの実行委員会に任せることとなった。ガイドラインでは 3 つ以上のパラレル・セッションでも良いことになっている。

Wood-Gush Memorial Lecture の講演者には Wood-Gush Memorial Trust から 400 ポンド補助があるが、この額は全く増えていない。実際、この額では場所によっては交通費もカバーしきれない。そこで、Janice Swanson 女史と Marek Spinka 氏が Alistair Lawrence 氏とコンタクトして 800-1000 ポンドに増額し、今後 5 年おきに見直すことにすべく話しあうこととなった。

各地域の理事からの報告について Victoria Sandilands 女史から報告があった。またウルグアイの Rodolfo Ungerfeld 氏から昨年第 1 回のラテンアメリカ地区の ISAE 地区学会があったことが報告され、講演要旨が配布された。また ISAE をホストとする各地域のウェブサイトが立ち上がっていることが報告された。これに関する論議の中で、近藤から英語圏以外のウェブでは、例えば日本では独自のウェブが展開しているが日本語で書かれており、外国語圏からウェブに入っても読めないだろう。逆に日本のウェブからは ISAE にリンクしており、これは読める状況にあるという問題点が指摘された。なお、この学会の後、コミュニケーション担当の Derek Haley 氏から読めなくても良いから ISAE にリンクさせたいとの連絡があり、JSAAB のウェブを教えたことを事後であるが報告しておく。これ以外に米国から新しい地区理事として Candace Croney 氏が選出されたことが報告された。

Editor's Report では ISAE の認定学術雑誌である Applied Animal Behaviour Science (以下 AABS) の編集部から Wim Meester 氏が出席し、出版状況など報告した。2007 年は前年に比べ、出版数が若干減少したこと、リジェクト率が 2005 年の 50% から 2007 年には 60% にあがっていることが報告された。投稿者は西ヨーロッパであがり、米国・カナダで減少傾向にあった。AABS は ISI Behaviour Science Category では 45 誌中 36 番目の位置づけではあるが、ウェブでのダウンロードは 2007 年だけで 330,000 件に及んでいる。投稿が減少傾向にあるのは本誌が実験動物を扱っていることが十分知られておらず、この分野での論文が他誌へ流れているのでは、という指摘があった。

新たな役員体制が選ばれて、学会での総会で認められた役員は以下の通りである。

- ・ Senior Vice President: Marek Spinka (07-09)
- ・ President: Janice Swanson (07-09)
- ・ Junior Vice President: Vicky Sandilands (07-09)
- ・ Secretary: Anna Valros (04-09)

- Treasurer: Deborah Goodwin (04-09)
- Sr Editor: Joe Garner (07-09)
- Jr Editor: Hanno Wurbel (07-09)
- Assistant Secretary: Bas Rodenburg (07-11)
- Education Officer: Maria Andersson (06-10)
- Procedural Advisor: Carol Petherick (06-10)
- Ethics Officer: Stine Christiansen (06-10)

このほか、Membership Secretary (08-12)として Hans Spooler 氏が、Communications Officer (08-12)として Keelin O' Driscoll 氏がノミネートされた。

以上の他、名誉会員 (Honorary Fellow) の推戴 (ISAE2009 Cairns) が提案され賛成された。本人を驚かすため、当該学会までこの件は公表しないことになった。皆様もお楽しみに。

また前回話題になった OIE 主催のカイロミーティング参加はキャンセルとなったことが報告された。主としてあまりにも会場確保経費が高額だった為である。しかし、今後もいかに獣医学会と連携していくかは検討すべきであり、同時に発展途上国への applied ethology 発展への働きかけも積極的に行うべきであることが確認された。

今回は 2 - 6 February 2009 にメール会議で行うことが確認され、会議は終了した。

さて、この会議で各地区理事の報告の時に、実は私からアジア地区理事の交代について提案した。これは本学会開催前に、応用動物行動学会の副会長、前会長、事務長などと話しあっていたもので、近藤はすでに 5 年近く地区理事を務めており、そろそろ交代すべきだと提案し了承されたことに基づいている。日本サイドの話し合いでは、次期地区理事を現応用動物行動学会理事の一人である植竹会員を推挙したいと希望している。ただし、担当理事の Victoria Sandilands 女史から、その件については別に近藤と担当理事が話しあい、担当理事の提案という形で理事会に出す方向で行きたいとのことだった、筋としてはその通りなので、一段落したら改めて Vicie 女史とコンタクトする予定である。なお、この件についてご意見のある方は近藤まで連絡されたい。

ダブリンでは 1 日に 1 度は驟雨に見舞われた。UCD はキャンパス内に無線ランが張り巡らされており、持って行ったラップトップで日本とも自由にメールできた。ただしこの設定には、東海大学の伊藤会員の絶大な協力があって初めて恩恵にあずかれたものである。紙面をお借りして氏に感謝したい。ダブリン博物館で見た泥炭地に埋まっていた古代人のミイラは数年前に突然大学と本学会を辞めて、就農した S 会員を偲ばせるもので、見学した前会長はじめ一同は氏を思いしばし瞑想したことを付け加えて、この稿を終わろう。

以上

◇ 第 42 回国際応用動物行動学会(ISAE)参加報告



新村 毅

(麻布大学大学院獣医学研究科・博士後期課程 2 年)

応用動物行動学会からの助成金を受け、第 42 回国際応用動物行動学会に参加した。学会は、8 月 5 日～9 日に、アイルランドのダブリンにある University College Dublin にて開催され、日本からは私を含めた 10 名の参加があった。

1 日目は、体内メカニズムなどを含めて動物を「Whole animal」として理解することが重要であると説いた Wood-Gush Memorial Lecture (F. Wemelsfelder, イギリス) から始まり、動物の扱いは動物だけでなく人・地球環境の観点からも重要であるとした Plenary session (M.C. Appleby, イギリス) に続いた。例年通り、朝は Plenary session で始まり、その後 2 会場での口頭発表に移り、それらの合間にポスター発表やワークショップが組み込まれる形態であった。Appleby 氏以外の Plenary session は、L.J Keeling (スウェーデン) らによる正の情動研究における理論的枠組み、J.W.S Bradshaw (イギリス) による犬の行動発達・社会的認知能力、J.N. Marchant-Forde と R. M. Marchant-Forde (アメリカ) による行動の記録の自動化、M. Kiley-Worthington による動物の認知・意識であった。

私は、産卵鶏を中心として、発表・ワークショップを回ったので、それらの見聞から感じたことを中心に報告したいと思う。産卵鶏の研究は、収容面積・止まり木・巣箱などの飼育システムに関するものが多い一方で、行動遺伝学的研究がもう 1 つの大きな潮流になりつつあった。これは、Keeling の Feather pecking の QTL 解析 (Nature, 431: 645-646 (2004)) に始まったもので、特にスウェーデンの P. Jensen グループが研究を急速に進めている。参加したワークショップ「The influence of genetics and breeding on farm animal welfare」では、QTL・マイクロアレイ・多型などによる遺伝子型解析が紹介され、方向性や技術的な問題などが議論された。このように、飼育システムなどの環境要因と遺伝的要因が 2 つの潮流になりつつあることを考えると、行動に影響するこれら 2 つの要因を、いわば Wemelsfelder 氏や Appleby 氏が言うように、全体として総合的に理解することが必要なのかもしれない。しかしながら、Wemelsfelder 氏が言うように、複雑極まりない動物の行動を総合的に理解するための新しいアプローチが必要であることは言うまでもない。現在のところ、飼育システムの研究も行動遺伝学的研究も、大規模に実施されているものの、特に目新しいアプローチを提案しているわけではなかった。私自身も行動遺伝学的研究を進めているが、本学会で、遺伝子型解析は行動学者による安易なものであること、革新的なアプローチは存在しないことがわかり少しばかり安心した。しかしながら、その一方で、規模が小さい日本では、独創的なアイデアがないとフロントランナーにはなりえないこと

を改めて痛感させられた。

学会期間中には、近藤先生のとついで Appleby 氏と夕食を共にすることができ、貴重な時間を過ごすことができた。Appleby 氏は、日本ではお馴染みであるが、産卵鶏の福祉、特に福祉ケージ開発の中心人物であり、私は今回の学会で念願の初対面を果たした。Appleby 氏には、英文校正を含めた論文に対するコメントや実験のアドバイスを頂いているお礼を言うと同時に、福祉ケージの情勢についても伺った。Appleby 氏曰く、福祉ケージを多く採用している国がある一方で、ケージ自体を認めない国も多いとのことであった。恐らくこれは、バタリーケージも福祉ケージも同じケージ飼いとしてしか認められていない評価体系に問題があるのだろう。

私のポスター発表は、Appleby 氏を含め何人かの方に見て頂いた。「飼育システムが違っても産卵鶏が嘴を使う頻度は変わらない」という結論の研究であり、結果も明瞭だったため、いずれの人からも面白いというコメントを頂いた。しかしながら、思ったよりも見に来てくれる人は少なく、この意味では、やはり口頭発表する意義は大きいと思った。同時に、口頭発表のためにも、議論のためにも、また海外とのネットワークを作る意味でも、書く・読むだけでなく聞く・話すことを含めた全ての英語能力が必要であることを改めて実感した。

ともあれ、前述したように、国際学会における研究発表は、規模も大きく新鮮で、とても刺激的であった。これまで ISAE 2005（日本）、ISAE 2006（イギリス）と参加したが、特に初めての参加だった ISAE 2005 は、国内学会しか知らなかった私にとっては、世界の広さを知ることができた記憶に新しい経験である。小さいながらも 1 つのターニングポイントであったこともあり、大学院生には国際学会にも積極的に参加して頂きたいと思っている。このような意味では、参加助成金や ISAE 2005 は、大変ありがたい機会であり、この場を借りて近藤誠司会長ならびに応用動物行動学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

◇ 第 42 回国際応用動物行動学会(ISAE)参加報告

多田 慎吾

(北海道大学大学院農学院 博士後期課程 2 年)

2008 年 8 月 5 日から 8 月 9 日にかけてアイルランドのダブリンで開催された第 42 回国際応用動物行動学会に参加した。学会はダブリンの中心部から少しだけ離れたユニバーシティ・カレッジ・ダブリン (UCD) で開催された。UCD のキャンパスは広大で (120 ha ほどあるらしい)、新しくてきれいな感じの建物がゆったりとしたスペースに散在していた。学会のメイン会場である O'Reilly ホールの前には噴水のある湖があり、特に夜は噴水がライト

アップされ非常に美しかった。私はキャンパス内の寮に宿泊したのだが、この寮も学生寮とは思えないほどきれいで設備が整っていた（個室にシャワー、トイレ付き、カードロック、無線 LAN など）。キャンパス内にはバスも通っていて、ダブリン市街へのアクセスにも不自由しなかった（学会初日に指導教官である近藤誠司会長が理事会に出席している間、心から気がねしつつもダブリン観光を存分に楽しんだ）。このような学会会場で、アイルランドでの滞在を快適に過ごすことができた（不満は学食での朝食がパンかシリアル類だけだったことくらい）。

学会発表は一部のワークショップを除けば、全てメイン会場の O'Reilly ホールで行なわれた。2つの口頭発表会場とポスター会場が全て隣接していたため、移動にストレスを感じることなく自分の興味のある発表を見に行くことができた。しかし、移動時間がないとはいえ、口頭発表の時間管理については持ち時間をオーバーすると強制終了させられるほどの厳しさはないため、第1会場と第2会場で口頭発表の進行のずれが生じることもややみられた。しかし、これだけの規模の学会であるのにも関わらず口頭発表の会場が2つしかないという構成のため、聞きたい口頭発表の時間が重なるということが少なかったことはよかったと思う。

発表の中身はというと、近年の応用動物行動学の流れをそのままに、アニマルウェルフェアに関連する発表が多くみられた。一般の口頭発表やポスター発表だけでなく、プレナリー講演、ワークショップにもアニマルウェルフェアに触れるものが多かったので、放牧家畜の食草行動の研究をしている私は少し疎外感を感じるほどであった（応用動物行動学に対する社会のニーズがそこに集まっていることを改めて考えさせられる機会となったけれども）。

そんな中、しっかりと Grazing Behaviour の口頭発表セッションもあり（4題ではあったが）、放牧家畜の採食選択や群での移動行動といった自分が直接的に検討したことのあるテーマばかりが扱われていて、どれも興味深く聞かせてもらった。特に、私が今回ポスターで、放牧牛群内の個体の移動方向について発表していたこともあり、放牧家畜の群での移動行動を扱った2題（ヒツジ、ウシで1題ずつ）の発表には参考になる部分があった。私自身のポスターセッションでも、その発表者やそれらの口頭発表をふまえてポスターを見にきてくれる参加者と話をすることができ、有意義なポスター発表ができたといえると思う。生態学の分野も含め、動物の群の集団行動についての研究は最近注目されているテーマであるように見受けられる。しかし、議論を通じて、私とその行動の機能に興味を持っていたのに対し、多くの研究者達は群の集団行動が成り立つメカニズムの方に着目しているのかなと感じた。このような流れを感じられたことは1つの収穫であったかもしれない。

さて、私はもう1つ別の国際学会に参加する機会があったのだが、それを踏まえても、この国際応用動物行動学会はやはりアットホームな学会なのだと思った。比較的規模は小さいが、そのため学会中に研究者同士が何度も顔を合わせることがあり、海外の研究者達

と交流を深めやすい。自分が参考にしたことのある論文を多く発表しているような有名な先生もその例外でなく、私のような学生の参加者が、著名な先生に比較的話しかけやすい雰囲気のある学会であると思う。

今回の学会での私にとってのそんな存在は、放牧家畜の食草行動に関する論文を Applied Animal Behaviour Science にも多く発表している英国の S.M. Rutter 博士であった。学会初日のウェルカムパーティで、近藤誠司会長に紹介をしてもらい顔は覚えることができたものの、有名な先生だけあり、見かけるといつも誰かと話をしているという状況で、話しかけるチャンスはなかなかなかった。しかし、本学会ではポスター発表で Rutter 氏がプレゼンテーションをするので話をする機会はあると思っていた。しかし、今回の Rutter 氏の発表は放牧家畜の食草行動についてではなく、なぜかクラシック音楽のイヌを落ち着かせる効果 (!?) についてであった。何はともあれ1度話をしておこうと思い、ポスターセッションごとに Rutter 氏のポスターを訪れた。しかし、忙しいのか学会前半のポスターセッションでは Rutter 氏は現れず、学会最終日の最後のポスターセッションでやっと Rutter 氏を見つけることができた。それでもやはり常に誰かと話をしているという状況は変わらず、変に思われているかと思いつつもポスターを見つつ話が途切れるのを窺っていたところ、ポスターセッション終了間際に話をすることができた。ポスターについての質問に Rutter 氏は明るく答えてくれ、また、ヘビメタを聞かせてみるとイヌは落ち着きがなくなったといった実験も裏話的なものも聞かせてくれた。しかし、すぐ次の口頭発表が始まる時間となり、ウシやヒツジの話をする機会をつくるにはまた苦労することになるかなと思いつつその場は別れた。

しかし、チャンスは幸運にもすぐ訪れた。その口頭発表セッションの後、近藤誠司会長から「もう最終日やからダブリンの街中観てこようぜ」といった（優しい）誘いを受け、その前に自分のポスターを片付けなければならないということで、（仕方なく）ポスターをはがしにいったところ、たまたま Rutter 氏が私のポスターを見ていた（結果オーライ）。こうして棚ボタ的に Rutter 氏と話をすることができた。結局、話した内容はほとんど実験の方法についてであったが、Rutter 氏に自分の研究について知ってもらい、また、面白いと言われ、単純にうれしかった（Rutter 氏の論文についての質問もできていればなと思うが）。

以上のように、本学会では国際応用動物行動学会の優しい雰囲気のもと、自分のポスター発表と関連したところで海外の研究者達と交流することができ、その点では大変有意義であった。しかし、逆に自分のポスター発表の内容以外のところではほとんどそれができなかった、という実感もある。論文等で自分のことが知られていない分、ポスターでの発表内容のみに頼りきりで、他の研究者達と接していたかもしれない。自分と自分の研究をこういった場でよりアピールするために、まだできることがあるのではないか、と感じている。

最後に、本学会には応用動物行動学会の国際応用動物行動学会派遣等基金から助成を受け、

参加することができました。心から感謝いたします。

◇ 第4回現場レベルでの動物福祉評価に関する国際ワークショップ (WAFL) 参加報告



瀬尾 哲也 (帯広畜産大学)

秋の気配が感じられる9月10日から13日、ベルギーのアントワープ大学で行われた International Workshop on the Assessment of Animal Welfare at Farm and Group level (WAFL)に参加した。このワークショップは、3年に一度開催されるもので、1999年コペンハーゲンから始まり、前回は2003年のウィーンで開催され、今年が4回目である。参加者はヨーロッパの研究者が大半であるが、カナダ、アメリカ、オーストラリアからの参加もあった。またチリ、ウルグアイ、メキシコなど Welfare Quality プロジェクトに加わった国からの参加者も目立った。参加者は総勢260名である。家畜福祉評価だけのワークショップでこれだけの人数が集まるということは、いかに家畜福祉評価法が注目されているかがよく分かる。日本からは、茨城大学の小針大助氏、麻布大学の新村毅氏が参加した。招待講演、口頭・ポスター発表ともに8つのセッションがあり、家畜福祉指標の自動記録法の開発と改良、情動および人間と動物の関係評価、家畜の遺伝的改良による福祉の向上、家畜の健康評価、家畜福祉法の開発と改良、フリー・トピック、ステークホルダーの意向、家畜福祉評価法の現場への応用であった。また5つのワークショップ(乗用馬、動物園、粗放的生産システム、跛行、家畜福祉法)も開催された。ポスター発表の時には、7種類ものベルギービールが提供され、グラス片手に討論した。またコーヒブレイクの時にはベルギー名産のチョコレートやワッフルも堪能でき、食べるのも忙しかった。今回我々が特に注目していたのは、2004年に始まったEUの家畜福祉研究プロジェクト Welfare Quality の進捗状況である。既に家畜福祉評価基準が作成されており、それをもとに実際に農家レベルで適用した乳牛と豚に関する結果報告もあった。乳牛では、Good feeding, Good housing, good health, appropriate behaviour という4側面から12の評価大項目が作成され、最終的に Excellent, Good, Basic, Not classified の4段階で4側面ごとに評価し提示するというものであった。実際の評価の結果調査者間の信頼性(誤差)やトレーニングの必要性、動物ベースの評価指標は長い調査時間が必要であったこと、放牧地での福祉評価に関する研究が少ないなど、実際的な問題点も挙げられた。また、我々も発表した ANI(Animal Needs Index)法については、イタリアでの ANI 法を改良し、オーガニックファームの評価を試みた発表のみしかなかった。その他、管

理者の接し方と生産性との関係に関する発表も多かった。ブタの去勢が将来的に禁止されることを見通し、遺伝的改良によりアンドロステロン、スカトール、インドールの発生を抑制しようとする研究も興味深かった。さらに、ウシ、ブタ、ニワトリ、ウマ、ヒツジといった家畜以外にも、魚類やウサギに関するポスター発表もみられた。

次回 2011 年の本ワークショップは、行動研究者にはおなじみのカナダのゲルフ大学で開催されることが発表された。

◇ 家畜福祉学（イシイ）寄附講座開設と記念講演会のお知らせ

二宮 茂（東北大学）

家畜福祉学（イシイ）寄附講座が2008年10月1日、東北大学大学院農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センターに開設されました。講座に関する情報はHPを参照してください。（<http://www.agri.tohoku.ac.jp/animal-welfare/Top.html>）

なお、その寄附講座の紹介を兼ねて、2008年11月15日（土）と16日（日）に家畜福祉に関する講演会を開きます。内容は主に学部学生、大学院生向けに、家畜福祉に関する話題、及び、東北大学で行ってきた研究を紹介すると共に、寄附講座が設置される農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センターのフィールドを案内しながら、家畜福祉と畜産について議論を深めます。本講座や家畜の福祉に興味を持たれる方や本講座へ進学を希望する方、是非、参加してください。

また、来年の3月末に仙台（24日：消費者、生産者向け）と東京（29日：一般市民向け、主催：農業と動物福祉の研究会）で開催予定の動物福祉に関連したシンポジウムの企画にも関わっています。詳細が決まり次第、報告させていただきます。

◇ 編集後記

夏の暑さが和らぎ、過ごしやすい季節になってきましたが、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか？今回のニュースレターでは、8月、9月に開催された国際会議の参加報告を中心にお届けいたしました。これから年末にかけても様々な研究会や学術会議が各地で開かれる予定です。前回もご案内いたしました、11月7日には、当学会主催で展示動物の行動調査に関する体験型研修会も東山動物園で開催されます。次号は1月頃にそれらの報告などをご案内できればと思っています。また、春の大会やシンポジウムの開催情報についてもご案内させていただきたいと思います。（ニュースレター担当 小針大助：kohari@mx.ibaraki.ac.jp）